
たとえ悪魔とののしられようとも。

沙凪

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たとえ悪魔とののしられようとも。

【Zマーク】

Z8837A

【作者名】

沙風

【あらすじ】

嫌われ者の闇斬光と人気者の姫野瑞希がある晩の事件をきっかけ
にふれ合い、『紅』^{クリムゾン}という名の悪魔との戦いと日常生活の中で、光
が瑞希を通して本当の自分を探していく自分探しの物語。

『プロローグ。』（前書き）

読者の皆さん、じんにちば。沙凪です。
読みにくい点がいくつかあると思いますが、ご了承ください。

『プロローグ。』

悪魔。

この世にはそんな呼ばれる方をする奴がいる。

俺のような闇に生きる者達の事だ。

この世の人間は知らない事実。それは本当の悪魔の存在だ。

俺達は奴等から何も知らない人間達を護る為に存在する。

俺達はどんなに傷付こうとも護らなくてはならない。

たとえ悪魔とののしられようとも。

EP 1 「事件。」（前書き）

いんばんは、沙田です。

サブタイトルのEPは「Hペーント」と読みください。それでは、たとえ悪魔とのしられようとも。をお楽しみください。

見ろよ、アイツ。

ああ～『闇斬』？アイツ本当に暗くて不気味だよなあ。

あいつの腕にヘンな模様みたีあるよなあ～。お前も見た事あるか？

見てねえよ。気持ち悪くて見ていられるかよ。
つか、アイツのあだ名つてさ・・・

あつ、あの人來たわよ。

あの人つて何考えてるかわからなくて気持ち悪いよね～。
腕の入れ墨、あれ宗教の関係かなにかじやないの？きっと、やっぱ
事やつてるんじゃない？

近寄らない方が身の為だわ。

マジで、あの人あだ名ピッタリよね・・・

・・・悪魔・・・

俺はそう呼ばれている。闇の世界で生きる者として罵声を浴びるのは仕方のない事なのかもしねりない。

「瑞希、お皿どいで食べる？」
「屋上でよくない？」

「じやあ、一歩上へ行こ！」

ギイイイ・・・ガチヤン！！

「今日は晴れてて気持ちがいいねーーー！」

「そ、う、た、ね、え、り、瑞、希、」

「ねえ、ううへ
しやおり い二もの場所

「あひ！！あーつま……」

」・・・・・・・

「ちょっと、そじどいてくれない? 邪魔なんだけど『悪魔』! ! !」

「・・・俺がここを動く必要はない。」

私はそこに座りたいんだけど、アンタが邪魔で座れないんだよね。

۱۷

「……は、ム薩の詩等席なつていたんだが、お前が

「御用」の特徴は、主に「御用」の「御用」である。

『

「・・・そうね、こんな奴の傍にいたらこっちがおかしくなるわ。」

俺の名は、『闇斬光』^{やみきりひかり} 銀龍高等学院に今年入学したばかりだ。だが、俺は他の奴らとは違う。俺は闇に生きる存在だ。

「お~い、H.Rは終わりだ。日直、号令頼む。」
起立・・・・・礼。

「真美～部活行くよっーー！」

「あっ、うん！…待つてよ瑞希～」

「待ってるわよ～～」

「もうすぐ大会だねえ～瑞希ならきっとレギュラーとれるよ～～」

「真美だつて、上手じやない。2人でレギュラーとううね～～」

「でも、一年生でレギュラーなんてとれるのかな？」

「努力よ、努力！…頑張れば慣れるよ～～」

「そうだね、頑張らなくちゃつ～～」

「おいつ～～姫野～～腰が高いぞ、もつと腰を落とせ～～」

「はいっ～～」

「うわあっ、監督厳し～い。瑞希怒られっぱなしだね。」

真美が笑いながら話をかけてきた。瑞希は、それに答えるがとても
じゃないが元気な返事は返せなかつた。

「大会が近いからつてこんなに練習するなんて・・・。だいたい、
なんで私ばかり・・・」

「それだけ期待されてるんだよ、瑞希はつ～～」

「どうだかねえ～～」

ムスッとする瑞希に真美は優しく、そして明るく答えた。しかし、
瑞希は疲労のせいか薄い反応をした。

「こらあつ～～喋つてるヒマがあつたら走れ～～！」

「はつはい～～」

私は、『姫野 瑞希』銀龍高等学院に今年入学した一年生。バスケ
ツトボール部に入部し、毎日を汗と努力と友情の青春で生きている。
大切な人は親友の『麻野 真美』で、嫌いな奴は『闇斬 光』だ。

「今日も疲れたねえ～。あつそつだ真美～～夕飯どこかで食べてい
こうよつてか、ラーメン食べに行こ～～～割引券の期限今日まで
なんだ～。」

「またラーメンですか～。さつ氣なく5日連続ですよ？昨日も同じような内容でラーメン屋に行った記憶が・・・。私はラーメンを見るたびにこの5日間を思い出すよ。」

「まあ～いいじゃなし、美味しいんだし この瑞希のラーメン好きにも困ったものだわなどと思いつつもラーメン屋に足を運ぶ真美であつた。

「ふあ～～、美味しかつたあ～～せっぽ、オジちゃんの作る醤油ラーメンは最高だよ～～！」

「私は塩が一番だと思うな～。」

「醤油なのよ～～ね～、オジちゃん～～？」

「ん？いや、オジちゃんは美味しいって言われればどの味でも構わないよ～あははは。」

「醤油が一番って言こなさ～～よお～～！」

「あははは、ゴメンよ瑞希ちゃん。お詫びに醤油ラーメンの割引券あげちゃうよ。あははは。」

「あ～、オジちゃんダメよ～の子に割引券なんか『えりや。私が毎日付き合わせれるんだからあ。』

「いいからいいから じゃあ、オジちゃんまた明日来るね～～。」

「はこよ～、いつでもこりひしゃ～こ。」

「明日も来る気満々だね、瑞希。少しは私の事も考えてよね。」

「考てるよ～～考てるけど、己の欲望には敵わないのよ～～。」「考えてないじゃない～・・・。」

お気楽な瑞希は真美の意見をまったく聞かずに明日もラーメンを食べようつだ。その後もいつもの様な会話をしていくうちに田代の近所まで来ていた。

「やうそ、真美。お願いがあるんですけどお～～。」

「宿題でしょ？ たまには自分でやりなさいよねえ。」

「さっすが真美 じゃあノート渡すから、明日の朝起^ひじて来る時に渡してくれ……。」

瑞希と真美の家は隣の隣であつた為、昔から真美が瑞希を朝起^ひじに行き、朝食を一緒に食べるというのが暗黙の了解であつた。それは、瑞希の母が朝には仕事に出掛けてしまつ為朝に弱い瑞希を起こす者がないからである。瑞希の父は数年前に不慮の事故で亡くなつてしまつている為今現在姫野家を支えているのは、瑞希の母である。その関係で母は家を空けている事がほとんどであった。

「どうしたの？」

「あつりやあー、ノート忘れてきちゃつたあーテヘッ。」

「テヘッ、なんて言つてもダメだよーー私は先に帰るからねつーー！瑞希の家の掃除もしなきゃいけないんだから。瑞希つば掃除なんかしないでしょ？」

「真美のけちいー。いいよー一人で取りに行つて来るから。」

「遅いから気をつけてねーー！」

「取つて来たら家に届けるよーー！」

「はあーい。」

部活で疲れ果てた体を氣合^{きご}いと叫^{さけ}う名のエネルギーで走らせ一十分。瑞希の目の前に学校が見えてきた。

「はあはあはあ、んつはあはあ・・・。ああーー、部活の後にこの距離を全力で走るもんじやないわ、走り死ぬわ・・・。」

警備員さんが閉めたのか、校門は鍵が掛けられていた。が、瑞希はそんな事はお構い無しに校門をよじ登り、教室へと入り込んでいた。

「あつたあーー 私のノート発見ーー早く帰つて真美に宿題やつて

もりおうつと 「

ノートを手に取り、教室を後にしようとしたその時。
ドオオオオン・・・。同じ階の理科室の方から爆発音が聞こえてきた。

「ななななな、なによお！…なんなのよお・・・。理科の先生、
実験にしちゃやりすぎじゃないのよ？学校破壊する気？公共の物壊
したらいけないって知ってるのよ～・・・。」

瑞希は、[冗談を言い聞かせおびえる自分を励ました。すぐ帰ればいいものの、興味本位で理科室へと向かって行く。
覗き込むように理科室を見ると窓側の壁や窓ガラスに大穴が開いていた。まるで何者かがここで争ったかのようだつた。

「何よ、コレ。喧嘩かなんか？それにしちゃ物が壊れすぎじゃ・・・。
」

唚然とする瑞希の背後に何やら怪しげな影が近づく・・・。

「・・・つー！だつだれ！？」
「姫野、こんな時間に何やつてるんだ・・・はやく帰れ・・・よ・・・。
・。」「
「なつなんだ、理科の先生の平尾先生じやないですかあ。びっくり
した～。」
「はや・・・く・・・かえれ・・・よ・・・退学・・・にされ・・・
たいのか・・・。」
「先生？大丈夫ですか？具合悪そうですが、病院に電話してきま・・・。
・。」「

瑞希が携帯を取り出そうとした瞬間、田の前にいる平尾が突如異様な姿へと変貌していく。・・・。とても醜く、おそましい姿へと。

「血が欲しい！！チガホシイ！！！ぐうああああ！！！」

恐怖のあまり座り込んでしまつた瑞希に魔の手が襲い掛かる。

瑞希は叫びながら目を瞑つた。逃げる余裕は無かつた為、頭を手で押さえ無事を祈つた。

「おい、伏せろ！！」

瑞希はその言葉を聞き、とっさにしゃがみ込んだ。するとその上を先ほどの声の持ち主が飛び越え、怪物に一発の蹴りをかました。怯んだ怪物にもう一度蹴りを入れた。その声の持ち主はしゃがみ込んでいる瑞希を抱きかかえ場所を教室へ変えた。

「だつだれ？」

「ちつ。なんで人がいるんだよ。いるならちゃんと連絡しろよ、あのやうひ。」

辺りは真つ暗で人の顔など見えたものではないが、その人物の顔を見続けていると、月の光が一瞬差し込み顔が見えた。そこにいたのは。

「闇斬 光・・・？」

「・・・ちつ。顔まで見られちまつたか。ああ～関係ない人間巻き込んじまつたな・・・。」

「なんで、アンタがここにいるのよ！…てか、あれは何な訳？」

「・・・あれは本物の悪魔。」

「は？何よそれ？悪魔なんている訳無いじゃない。」

「・・・お前も見ただろ。あれは悪魔だ。正確に言えば、たちの悪い動物か。」

「あれが動物？そんなもんじゃないわよ！…！」

この事態についていけない瑞希は完全に冷静さを失っていた。

「だいたい、なんであなたがここにいるのよ！…！」

「・・・俺は、あいつ等みたいな悪魔を退治する為にここに来ただけだ。俺も悪魔だなんて言えたたちじゃあないがな。」

「えつ？何、あのあだ名の事？」

「・・・奴らは紅^{クリムゾン}つと言つ生物だ。今の世の中の人間には知られない、闇の生物だがな。奴らは姿形は人間と変わらないが、覚醒すると魔のよ^ウな姿になり、人を襲うようになる。」

「そつそんな事つて・・・。」

「・・・奴らは、国の判断で世間には知られないよ^ウにしている。今世の中に知れ渡つたら大混乱を招く。なぜなら、この世の人口の内、日本だけでもおよそ500人に1人の割合で紅がいると言わ^レている。まあほとんどの奴が未覚醒だがな・・・。」

「えつ？あの化け物がそんなにいるつて言うの？」

「・・・そう言わ^レている。詳しい数は俺は知らないが・・・。俺達は何も知らない人間どもを護る為に存在しているんだ。國の上層部の人間だけがこの組織の存在知つていて、この組織を援助してい^ルる。」

「・・・組織つてことは、他にもアンタみたいな人がいるつてこと[？]」

「ああ、そう言つ事だ。組織名は『紅^{クリムゾン}ハンターズ』通称『ハンターズ』正在^{アントラーズ}日本にいる狩人は20人程だ。」

「・・・そ、それはわかつたんだけど・・・。あの、さ、なんでアンタ自分は『魔だなんて言えたたちじやない』って言つたの？」
そう瑞希が尋ねると、光は教室の窓の方へと3・4歩程歩き、月を眺めながらまた話を始めた。

「・・・覚醒した紅どもは、昼間は未覚醒の状態と変わらないのだが、夜になると人間の血を求め人を襲う。覚醒した紅だと判断する方法が一つだけある。それは、夕方から明け方までの間に奴らの目を見る事だ。奴らの目は月の光を浴びると目の色が『紅色』になる。それゆえ、奴らの名は『紅』と言つ。」

そう言い終えると、光は瑞希の方に顔を振り向いた。すると・・・ガタツ・・・！光の顔を見た瑞希はある事に気が付き、数歩後ろに下がつた。

「・・・あ、アンタの片目・・・紅色・・・。」

光の右目は、瑞希の言うとおり紅色だったのだ。

「……だから言つただろ？俺は悪魔なんて言えたたりじゃないつて。俺は紅と人間の間に生まれた『半紅』なんだよ。」

「まさか、悪魔が本当の悪魔だったなんてね……」

「なんとでも言うがいい。それは変える事の出来ない事実だ。狩人の者は数人を除いて俺のような半紅だ。」

「じゃあ何？アンタも人の血を吸うわけ？」

「いや、半紅は吸血はしない。ただ、年に2回ほど輸血をする。輸血をしなければ体が弱体化し、生命維持が出来なくなる。」

淡々と話をする光に、新たな質問をしようとしたその時。教室のドアが壊れ、ドアの向こう側に紅の姿が見えた。

「……おつと、ゆっくりしていいる時間は無いようだ。詳しい事はあとで説明する。外までお前をつれいく。そのあとは自分でどうにかしろ。」

「ちよつと……。」

光は瑞希を抱きかかえ、教室の窓から校庭へ飛び降りた。

「きやあああああ！」

「騒ぐな。この程度では、俺は死はない。無論お前も死なせはしない。」

光の着地とほぼ同時にどおおおおん……と地面に低い重低音が響く。

「急げ、また奴に追いつかれるぞ。早く逃げろ……。」

「えつ！？あ、うん。わかった。」

瑞希が走り出すと光は走り出した瑞希を呼び止めた。

「……おい。」

「何よ……。」

「このことは誰にも言つくな。絶対だ。」

「わかつてゐるわよ！だいたいこんな話誰も信じないって……」

「……それもそうだな。さて、せつきの続きといへか。」

「ぐわあおんおおおーー！」

「・・・いくぞ。」

掛け声と同時に光の腕にある入れ墨のようなものがひかりだし、日本刀へと変化した。

「はあはあはあはあ……もつなんなんのよ……なんでこんな事になるのよ……！」

瑞希は真美の待つ家へ走り続けた。この事態を受け入れまいと現実から逃げるかのように。

「……あいつ、大丈夫なのかな……」

「まだ、こんなところにいたのか……。」

「うわあああああ……！」

「何故驚いている？」

「いきなり話しかけられたら、誰だつて驚くわよ……。」

「……そうか、すまない。」

「……あんた、やつきのバケモノはどうしたの？」

「問題ない。葬った。」

「はあ～～。よかつた～。」

「俺は、これから狩人の本部へ戻る。お前はいつもどう生活するんだ。そして今日のことは口外するな。」

「わかつてるわよ。」

「……じゃあな。」

そつ四つと光はどこかへ走り去つて行つた。

「ただいま。」

奥からエプロン姿の真美が出てきた。どうやら食欲旺盛の瑞希の為にまた夕飯の支度をしていたようだ。

「おかえり！－！遅かったね。」

「えつ、あ～その、ノートがなかなか見つかなくて……。」

「ふう～～ん。まあ、いつか。それより、瑞希お腹空いてるんじやない？どうせ何か食べ物ない？とか、あとで言つと思つて夕飯今作つてるの。もうすぐできるから、お風呂でも入っちゃえば？」

「うん、やうやく。」

「はあ～・・・なんか、どつと疲れた。『紅』か、あんなバケモノが存在していたなんて。ああ～、もうわけわからんによお。」

「瑞希～。もう『飯』できたよ。早く出て一緒に食べよう！！」

「はあ～い、今行く。まあ今の私が考えたって仕方ないか。よしつ！」

「明日あいつに問い合わせてやる！！」

「日直、号令を。」

日直が号令をかけ、いつもと変わらぬ授業が始まった。

・・・いつもと同じはずなのに同じじゃない。そんな気がする。周りが変わったのではない、私が変わったんだ・・・。

瑞希は心中でそう思つた。授業が終わり、瑞希は光のところへ駆け寄つた。

「ちょっと来て！！」

「・・・ん？」

「いいから来い！！」

光の返事を聞かないつちに、瑞希は光の手を取り屋上まで引っ張り出した。

「何のよつだ？」

「昨日の事、もっと詳しく述べなさいよーー！」

「ああ、そのことか。それなら、放課後、またここに来い・・・。

「ちょっと・・・どこ行くのよーー！」

光は屋上から飛び降りどこかへ行つてしまつた。

「に、逃げられた・・・。」

部活も終わり、屋上へと出た瑞希。あたりは薄暗くなり、町の明かりが美しかつた。

「・・・いない。」

姿がない。そこにはいなくてはならない光の姿がない。

「何でいないのよ・・・。」

そう吐き捨てるど、瑞希はその場に座り込んだ。

「・・・遅い。」

30分ほどたつたころ、ようやく光が屋上へ來た。

「すまない。本部に行つて、報告やら申請やらといろいろしていたんだな。」

瑞希はふてくされた顔で光をじっとみつめた。

「・・・・・・・・・・今からお前を狩人の本部へ連れて行く。あわせたい人物がいる。」

「えつ？ 本部に？」

瑞希の表情が一転した。少し瑞希はウキウキしていた。なぜなら未知の組織の本部へ行けるのだから。

「ねえ、どこまでいくの?」

「黙つてついて来い。もうすぐ着く。」

「わかつたわよ。あつ、真美に遅くなるつてメールしなきやつ！！」

「あつ、そうだ。姫野。本部に入る前に必ず携帯の電源は切った方がいい。いや、切れ。」

「えつ？マナー モードじゃダメなの？」

「アイツは、自分携帯以外が話しの途中で鳴るのが嫌いなんだ。」

「ただの自己中じゃん！！」

なんか、こうして話してると意外とこいつも普通なんだなあ・・・。

そんな事を考へているうちに人気のない廃工場に着いた。

「ここだ。」

「ここが本部？なんか、いかにもつて感じ。あつ、電源切るんだよね？」

「ああ、アイツがキレイでも俺は助けないぞ。痛い思いをするはずだ。俺は痛いのが嫌いなんだな。」

コツコツコツ・・・。自分の足音が鳴り響く。奥へ行くに連れて響く足音は大きくなる気がする。それほど中は静かであった。

「この部屋だ。」

そう言つて、光は扉を開いた。すると、今までの風景とは打つて変わつてキレイな会議室のような部屋に出た。

「やあ。『姫野 瑞希』さん。」

「あなたは？」

「あいつは、狩人日本支部の長だ。皆、支部長と呼んでいる。本名は『火渡 神』だ。」

「はじめまして。姫野さん、火渡です。」

「はじめまして。」

火渡は、以外にも普通で穏やかそうな顔つきだった。髪は耳にかかるくらいあり、顔はきりっとしていて真面目そうだ。メガネをかけているせいか、少々弱々しい印象を受ける。

「こいつが、このあいだ話した奴だ。大体話はした、この世界の眞の姿の・・・。」

「そう。で、君はどうするつもりなんだい？」

「こいつもも、狩人の任務をやらせてみる。眞実を知った以上、こいつにも戦う必要も出てくるはずだ。」

「そうだね、知つてしまつた以上彼女にも狩人へ入隊してもらいましょう。」

「ちよつと！そんなの困るわよ！！」

瑞希は、当然の如く拒绝した。

「いや、お前に断る権利はない。入らざるを得ないんだ。たとえ、どんな理由があつてもだ。」

「断る権利が無いってどういう意味よーー！」

「簡単に言うとだな・・・。」

「私から説明しよう。」

光の説明に割り込むように神が口を開いた。

「簡潔にすると、奴らに遭遇または接触した者は、己の意志にかかわらず身体の一部の性質が変化する。その変化は奴らにとつて脅威であり、奴らにも戦う必要がでてくる。つまり、奴らの攻撃から自分を守らなければならなくなる。それはには、我々と行動を共にし、戦う術を見につけなくてはならないからだ。それに、奴らの食事は人の生き血だ。つまり、奴らに大切な人を襲われる可能性も無くない。それから守る為には、君は狩人ヒューマン、入るしかないというわけだ。」

「そんなことって・・・。」

瑞希が途方にくれていると、誰かが走つて来るような足音が響いてきた。

「し、支部長っつづ！――！」

『ドカソッ！――』勢い良くドアが開くとそこには、男がひとり荒い息をたてていた。

「大変だつ！――支部ちょ・・・。」

『ドーン・・・ボンッ！――』

低い重低音が鳴り響くと、男の周りが爆発した。

「あわわわああわあわわわ・・・・。あつぶないな、支部長！――死んじゃうところだつたじやないかつ！――」

「当たり前だよ。狙つたんだから。」

神は、先程とは打つて変わつて、冷酷かつ残忍な雰囲気を漂わせていた。

「ど、どうなつてんの・・・？」

「今アイツはキレはじめている。あの男がノックもせずに部屋に入つたからだ。携帯が鳴つた時もああなる。」

「それだけで・・・？」

「神はそういう奴だ。」

なんか、面倒なことに巻き込まれちゃつたなあ・・・

「それより、朔魔。何があつたんだ？」

光が部屋に入つてきた男に尋ねると彼はあわてた表情でこいついた。
この男は『朔魔』と言つらしい。

「あいつが帰つてきたんだ！！！」

朔魔は血相を変えていった。

「あいつって？」

瑞希が光に尋ねると光はあきれた顔で応えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8837a/>

たとえ悪魔とのしられようとも。

2010年12月14日04時10分発行